大分大学教育学部附属幼稚園

大　幼

令和6年度
園長だより　No.9
令和7年2月21日

何を「おたのしみ」になりますか？

私は小学校時期に「おたのしみ」係を希望することが多かったと思う。小学校 6 年生の時には、「おたのしみ」会に向けての学級会の司会を任され、大変苦労したことを今でも覚えている。しかし、学級の意見をまとめることの難しさや経験のない新たな行事を実行していく過程等、今振り返ると大きな学びの経験だったことがわかる。

さて、附属幼稚園児たちの「おたのしみ」会は、歌や劇を表現するだけでなく、大勢の人前でチャレンジをするなどあり、穏やかな心境ではいられない会だ。しかし、親にとっては、その全ては子の成長であり、その一つ一つが幼児期にしか味わえない「おたのしみ」とも言える。

園児にとってみれば、この機会は親へのお披露目としての「おたのしみ」という意味はあるが、実は、将来に渡って自分の伸びしろに気付く「おたのしみ」ということになるのではないだろうか。

大きな鬼の姿が消えた

今年は節分や立春が1日前にずれたという年でしたので、週末自宅で節分行事をしたご家庭もあったのではないでしょうか。

幼稚園では昨年とちがい節分行事を集会的に行いました。園庭に集まった子どもたちのもとに現れたのは小さな鬼たちでした。鬼たちは子どもたちを取り囲み、「食べちゃうぞ～」と凄むと、子どもたちは鬼めがけて、「えい！」と豆新聞を投げつけ退治したのでした。

鬼役として特別出演することで、見事に主役の座を奪還した小さな鬼たちは、会が終わると、誇らしげに「鬼が来たんだって」とクールな姿を見せました。

春につなぐ会

お楽しみ会・研究会・研修会・協議会・・・つい最近ではリモート会議が一世風靡したが、その場の臨場感を肌で感じる対面型の会に振り子は戻りつつあるようだ。つまり、会の価値は、結果を生むというより結果を生む過程に重心が置かれているということではないだろうか。

先日、幼小の合同架け橋研修会が開かれた。今更だが、以前の小学校は幼児期の学びの価値を十分理解しきれずに、義務教育からが学びのスタートという仕切り直しを当たり前にしていた。しかし近年、幼児教育からの学びの継続が重要視され、その過程を具体的に附属幼小の教員間で学んでいる。今回も子どもたちが遊ぶ姿・学ぶ姿を通して、相互理解を深める機会となった。

そろそろ３月、今年度の結果を生む時期がきた。各種の会やアンケート等を経て、来年度に向けた準備に入る。春はもうそこまで来ている。